

〔工芸名品展によせて〕

釉裏紅の名品 ― 鳳凰文梅瓶と三魚文高足盃 ―

当館は、中国陶磁の精華の一つであります元時代と明時代の釉裏紅の名品を6点所蔵しています。そのうち、世界的に知られた二つの釉裏紅、「鳳凰文梅瓶」(元)と「三魚文高足盃」(明)を紹介します。

釉裏紅は、青花(釉裏青ともいい、日本では染付という)とともに元時代にはじまった技法で、その深みのある鮮やかな紅色は、銅分の彩料が透明釉の裏にあるために生まれます。銅の発色は不安定なため、理想的な鮮紅色は得難いですが、明時代の宣徳年間(1426―1435)には最も優れた釉裏紅がつくられました。その多くは、江西省の景德鎮窯で焼かれました。

「鳳凰文梅瓶」は、初期の釉裏紅の中で、最も堂々とした作風を示すものです。口造りが小さく、肩がまるく張る丈長の瓶を梅瓶と呼びます。口が小さくて、梅の細枝を入れるのみなので、この名があると中国の陶磁書に記されていますが、真偽は別にして、いかにも中国的な命名で楽しい。もともとは酒を入れる容器です。

この「梅瓶」は、潤いのある乳白の磁器に、紅色の釉下著彩(釉裏紅)文様が施され、豊かな器体とともに、どことなく艶やかな女性の立姿を感じさせます。文様の周

囲に、彩料の銅が、にじんだように淡い紅色を發し、この窈窕の妙趣が、思いがけない魅力をもたらしています。

器面全体は、帯状に鳳凰、飛鶴、花卉、菊唐草の多様な文様で埋めつくされ、肩に如意頭風の大きな区画をとり、脚部に尖頭の舌状文をめぐらしています。この意匠は、元時代の青花磁と共通する特徴で、元様式独特の潑刺とした生氣と力強さにみちています。

「三魚文高足盃」は、見込に染付で、「大明宣徳年製」の銘があります。景德鎮官窯の製品です。

高足盃は、高台を高くつくった盃のことで、馬上盃とも呼ばれ、魚や果実などの吉祥を意味する文様が好んで描かれました。

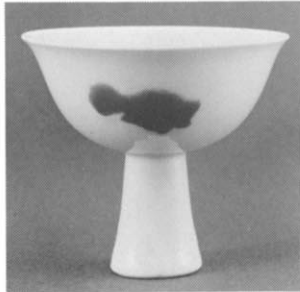
この「高足盃」は、わずかに青味を帯びた艶やかな白地に、三尾の紅魚の姿が、鮮かなままでに映し出されています。それは、ただの赤い斑点とも見えますが、静かに見ていると、澄みきった水の中で、微妙に動く魚のかけとも感じられ、私たちを魅惑的な世界へと導いていきます。その端麗な形に、紅一色の装飾効果が加味され、いっそう華やかで、ほんのりと香気さえ感じさせます。

(林 進)

釉裏紅鳳凰文梅瓶 元時代



釉裏紅三魚文高足盃 明時代



季刊 美のたより No.75

昭和61年 5月30日

発行 大和文華館